

できないことに どう であうのか？

(小学校 1 年生の 4 月～6 月のマット)

実践するにあたって

- ① 動物歩きから側転までのステップを、子どもたちの授業での動きをみながら考えていくこと。ゾウさんの最後の足の着地位置を変えてみることを試してみたい。
- ② 1 年生の 4 月～6 月という時期に、どんなグループ学習ができるのか、グループのなかでの様子をどうつかむのかという課題をかかえながら、教え合いができていくような問いかけをさぐっていくこと。

学習内容 授業の流れ

- ① くまさん歩き（子どもの考えた動物歩きをいれながら）
- ② とらさんさんぽ（前転を含むくまさん歩き）
- ③ おおまたきりん（おおまたあるき前転）
- ④ うさぎさん（うさぎの足うち）
- ⑤ らいおんさん（らいおんガオー山をとびこえ）
- ⑥ ぞうさん（ガオー、足、手、手、足、足）
- ⑦ ぞうさんの着地位置をかえながら側転に近づけていく
- ⑧ きれいな側転ができるこつみつけ
- ⑨ 歌マット
- ⑩ 発表会

授業のすすめ方

「前時に聞いた子どもの気づきを紹介する」→「みるポイントの確認」→「子どもの反応を見る」を繰り返していった。

4 月 5 月は、感想文を書かすことができないので、給食の時間に話を聞きまわったり、授業中にグループをまわったり、授業のおわりに話を聞く時間をもうけたりして、聞きとっていった。6 月からは感想文を書かせるようにした。

実践のなかで

毎日のように、朝学校に行くことをぐずっている子どもがでてきた。なかでも、マットの「とらさんさんぽ」のでんぐりがえりがうまくできなくて、班の子に、からかわれたことで、体育の時間になると泣きだす T さんが気になった。できないことにであったとき、体育の時間では、どうしていくのだろうか。それは、子ども達の姿でみせていくしかないと思った。

そこで、5 月 12 日は、授業がおわってから教室で、「今日、うまくいかなかったことは、なにかありましたか？」と聞く時間を設けた。このときに思いのほか、手を挙げて正直に困ったことを話せる子が多かった。その困ったことを次の授業の初めにみんなで考えていく時

間を作った。このことは、うまくいかないことをみんなに伝えても、恥ずかしくないんだ。それよりも、みんなで考えて解決してくれるかもしれないという意識へとつながっていく可能性を感じた。

5月26日は授業の最後に体育館でみんなを集めて、その日うまくいかなかったことを聞いた。Mさんが「右左がわからない」と訴えた。この訴えにより、番号付き輪ゴムを開発。

5月29日は授業のはじめに「いいところみつけ」の時間を設けた。前の時間にうまくできていた子を見つけて、その子の動きのいいところをみんなでみつけるという作業。

6月2日は授業の途中で困ったことに出会った子のところにみんなを集め、話し合う。

6月9日は「班でみんなに見てほしい人いますか」と聞き、推薦する人、自分を見てもらいたいという人、ちゃんと前よりも上達している人を選んでいる。

6月10日はテープをマット上に直線にして「これで挑戦してみたい人」と、やりたい人にみんなの前でやってもらう。この日から感想文を書き始めたので、この後は、感想文をもとに授業の初めに紹介していき、みんなで考える時間にした。なので、感想文に困っていることを書けば、次の授業でみんなで考えてくれるというパターンができ、感想文にみつけたコツを書けば、それも、みんなのまえで紹介してもらえるとというパターンもでき、書くことの意味はそこにあるのだと、思うことができた。

しかし、感想文をみんなで検証していくという作業はとても時間がかかり、授業時間の半分以上もそれに費やすことになった日もあった。これは、わたしの技についての知識のなさでもある。うまく子どもの気付きを調整できていないことも大きい。

今後は、みんなで検証していくなかみを精選し、あとはグループの教え合いにまかせていく方向にもっていければと、実践を振り返りそう思う。

考察

1年生のはじめの時期、困ったこと、慣れないことに出会い、しょんぼりしたり元気をなくしてしまったり、学校そのものが嫌になったり。以前のわたしなら、何を甘えてんのん、我慢せなあかんことなんか生きてたらいっぱいあるよって、思っていた。今もそう思う部分も多くあるが。

この実践の最中は本当に毎日のように、朝、学校に行くのが嫌で泣いていますという子が、入れ替わりであらわれていた。どの子も、わりと嫌になったきっかけが、はっきりしていたので、そのことを改善していくと少しは良い方向へいったりしたのだが、根はもっと深い所にあるような気がする場合もあった。

そんな毎日の中で、やっぱり嫌なことは嫌と言えることが大事なのかなと思えてきた。この実践のなかで、困ったこと、できないことを、みんなの前で言える子を見ることで、困ったことを、そんなふうに表示することから、何かが始められるのだとわたし自身が感じられた。だから、困っていることを表現した子をなんとかしてでもグループのなかで、できるようにして、その過程をみんなに見せたいと思った。

「できないことを、できないまま、しづかに我慢することはない。」今頃、そんなことに気づいた実践であった。